

第七回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

関根 清三 著『旧約における超越と象徴』

(1994年3月25日 東京大学出版会 刊)

関根 清三 せきね せいぞう 昭和25年(1950)東京生まれ。

専攻は、倫理学、旧約聖書学。東京大学文学部卒業。同大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。ミュンヘン大学大学院でDr. theol.。東京大学文学部教授(授賞時)。現在は東京大学大学院人文社会系研究科教授。著作に、『第三イザヤ書の編集史的研究』、『旧約聖書思想 24の断章』、『倫理思想の源流—ギリシアとヘブライの場合』、『倫理の探索—聖書からのアプローチ』、『旧約聖書と哲学 現代の問いのなかの一神教』、他がある。

受賞のことば

和辻先生を敬愛する後進のひとりとして、この受賞を大変うれしく存じます。選考委員は和辻先生の教えを直接受けた世代を中心とする優れた学者の方たちですから、何か和辻先生から間接的な一暖かい、そして厳しい—お励ましをいただいたような気もいたします。この本を書いてゆく修羅場を経て、文献学から哲学へと枠を抜け、自ずと私自身変わりましたが、この受賞を機に和辻先生のお仕事、特にその『倫理学』に非力ながら少しは応えて行くこともできればと思っております。

《選考委員評》

勝部 真長

『旧約聖書』の研究は、わが国では明治時代から内村鑑三、塚本虎二、平塚益徳、関根正雄、山本七平ら幾人かの研究者によりなされてきたが、本格的な神学的、倫理的な学術研究は本書をもって嚆矢とするといつてよいであろう。本書の著者は、ミュンヘン大学で神学の学位を取得し、ガダマー、リクールらの解釈学的方法を身につけ、ヘブリュー、グreek、ラテン、英・独・仏の文献を縦横に駆使して、『旧約』の原典批評を試み、しかも今日只今の人間的・実在的立場にたつて、平明な文体で発言しているのである。

『旧約』のなかの「十戒(第一章)、コーヘレス(伝道者)(第二章)、サムエル記、詩篇五一篇(第三章)、アダム神話(第四章)、第二イザヤ書(第五章)」などを取上げ、それらを通じて「超越としての神」とその「象徴としてののはたらき」を解説してゆくのである。

その際、先行の諸解釈(ニーチェ、ハイデッガー、波多野精一、コリングウッド、ヘルツベルク、グールダー、リクールらの諸説)を広く深く探索し、批判的に位置づけつつ、細心精緻な学問的探究がなされており、その博覧強記と学殖の豊かさは、驚くべきものである。

そうした学問的営為と同時に、著者自身の自覚と思索において、人間の罪と償いを通して、人間的生の根拠を問い、本来的生の在り方を追求しているのである。

特にモーゼの十戒についての和辻説を吟味し、「否定の道による主体の多化・合一の運動」という「人間存在の理法」が、絶対的否定性の否定の運動として、そこに和辻倫理学の超越的原理の存在を改めて確認し、和辻理論の正統性を裏付けている点は、最も注目すべきものと考えられる。

湯浅 泰雄

本書の題にみえる「超越」という言葉は神を指す。

そして「象徴」とは、神に至る通路となるしるしや事柄をいう。モーセがシナイ山で神の言葉をきいたのは、木々の中にもえるような光を見たときであった。光は神の語りかけを象徴している。著者は旧約聖書にみえる有名な物語、たとえばモーゼの十戒、伝道の書(コーヘレス)のニヒリズム、ダビデの不倫と神の救いの物語、アダムとイヴの楽園喪失、さらにイエスの先駆とされる第二イザヤの師弟の対話などをとりあげて、そこに示されている神と

人の関係について考察している。

この場合、著者はまず従来の研究と学説をくわしく検討した上で、それらに適確な判定を下してゆく。専門家の意見を十分にふまえている。それだけではない。著者はさらに、旧約学者でない一般の哲学者、たとえば和辻哲郎とかリクール、ガダマーなどの見方などを広く参照して、これらの物語が示している人間観や倫理観について深く考察を進めている。

私がこの本をよんで感銘したのはこの点である。聖書の研究は、それこそ無数にあるといっているくらいだが、専門研究者むきの本は古典学を知らない読者には縁のないものだし、興味ももてない。さればとって、型にはまった教会での説教のようなものでは物足りない。そういう読者に対して、聖書の物語の中に秘められている倫理や信仰の深い意味について、著者はわれわれに示してくれる。遠い古代の物語が息を吹き返したように、現代の人間に語りかけてくるのである。

著者の基本の考えは、倫理性の基礎には宗教性が必要だということにある。私はこの考えに共感を覚える。学問的厳密さをふまえながら、独創的見解を明快に打ち出し、聖書という古典が現代に対してもっている意味をよく明らかにしている。このようなすばらしい作品を受賞作として得たことは非常に嬉しい。

坂部 恵

『旧約聖書』という大部のテキストは、いうまでもなく、さまざまな時代の成立になる多くの成層を、ときにきわめて錯綜した形で含む迷宮にも似た世界である。西洋の文化の大きな源流の一つであり、今日におよぶ世界宗教の聖典でもあるこの書物が、今世紀、もっとも精細な文献学的探索の対象となり、解釈的分析のもっとも厳しい試練の場となったとしても不思議ではない。関根氏の研究は、こうした旧約学の長い蓄積を自家薬籠中のものとした上で、厳密な文献学の方法を駆使して旧約聖書のいくつかの最重要箇所を読みぬき、多くの新たな視界を開いて、日本の旧約研究に新時代を画するとともに、世界の学界にも新たな寄与をもたらす。

関根氏の研究を、単に高水準の文献学的研究におわらせず、魅力に富みまた今日に生きて働く思索の表現たらしめているのは、現代の人間の置かれた状況に対する氏の熾烈な関心である。この関心を抱いて、氏は一層一層と旧約のテキストの成層に分け入り、遂に古代ユダヤの民がそのものの意味を読み解かんとした層面とあい渉る。「十戒」、「コーヘレス」、「詩篇」、「アダム神話」、「第二イザヤ書」をめぐる綿密な研究は、ひとつひとつがこうした立て杭を掘り進める手探りの探索であり、それが鉦脈をさぐりあて、幾千年の時を超えてそこに思索の共鳴が起こるとき、われわれは著者とともに関根氏の醍醐味を知る。こうした探索の文脈の中に、現代哲学の手法もよく生かされており、たとえばガダマー、リクールらの解釈学の方法を実地にこれほど見事に適用した邦語文献の例をわたくしはほかに知らない。旧約思想の角度からする和辻倫理学の周到な批判的位置づけも、本書の寄与として特筆に値するだろう。